第30回

伝承の地を訪ねて

「お走り祭り」［養父市養父市場～長野］

神輿が走り、川を渡る　奇祭の物語

「ハットウ、ヨゴザルカ」のかけ声とともに走っていく神輿（みこし）。神輿がまるで軽く走っていくように見えたことから名前のついた「お走り祭り」は、江戸時代から続く奇祭だ。重さ150キロにもなる神輿は養父市の養父神社を出発し、同市の斎（いつき）神社まで片道20キロの道のりを2日間かけて往復する。首まで水に浸かりながら激流の大屋川を渡る「川渡御（かわとぎょ）」では、勇壮果敢な男衆の姿を一目見ようと多くの人が集まる。

斎神社の伝承によると、昔、但馬の地は泥海で人々の生活は苦しく、とても苦労していた。そこで但馬五社の神々は、土木の神様である斎神社の彦狭知命（ひこさちのみこと）に頼んで、豊岡市瀬戸の津居山を切り開いてもらった。泥水は日本海に流れ出し、但馬に豊かな大地が生まれた。そして養父大明神が代表として、彦狭知命にお礼参りしたことから、お走り祭りが始まった。

また、養父神社から斎神社へ「葛の葉餅」をお供えすることになっている。さらに、この時、養父大明神は「鮭の大王」の背に乗ってこられたとも伝えられ、鮭を川にいる神とする信仰がある。円山川を中心とした但馬の国生み伝承の一つとして「お走り祭り」が伝わっている。

（上）お走り祭り　（下）斎神社

《協力》養父市教育委員会 社会教育課

防カビ　除湿　脱臭　抗菌　防虫

呉服安心　漢方敷（かんぽうじき）

1枚 600円
縦35cm× 横97cm

最高級の特殊和紙で作られたタンス敷紙です。
ウコンと２種類の天然鉱石（トルマリン・ゼオライト微粉末）を配合し、
「半永久的な効力」で大切なお着物を守ります。

きものクリーニング 1割引（4月末まで）
大切なきものを いつまでも 美しく

シミ抜き　染め　替え　オーダー別染　お仕立　ガード加工　丸洗い

KIMONO SALON KEITANI
〒668-0084 兵庫県豊岡市福田1887-1
フリーダイヤル 0120-529-008
kimonosalon-keitani@live.jp

ハイスクール キラリ組

“キラリと光る”但馬の子どもたち！
未来を担う高校生をご紹介

be to HERO 06

インターアクトクラブ

【兵庫県立豊岡総合高等学校】

廃棄資材で日々を楽しく！アイデア溢れるボランティア

県北部唯一の工業科と、総合学科を併設する豊岡総合高等学校。1人ひとりの特性を尊重する教育をモットーとし、日々多くの生徒たちが個性を伸ばしています。そんな同校で地域奉仕を行う「インターアクトクラブ」同好会の、アイデア溢れるボランティア活動を取材しました！

黙々と作業を続ける男女15名の会員たち。
焼印の金型は工学科の生徒の自作。

ミニランドセルに付いているのは
コウノトリのシルエットチャーム。
先輩から引き継いだアイデアだ。

ピンクのテープを使い、乳がんの啓発活動である「ピンクリボン運動」にも賛同している。

「回を増すごとに新しい生徒のアイデアが加わっていき、
さらに良いものが生まれています」と、顧問からも驚きの声。

今や、各施設の入り口に当たり前に設置されている消毒液のボトル。その首元に巻かれている「ボトルネクタイ」と呼ばれる飾りをご存知だろうか。

「豊岡市内で見かけるボトルネクタイのほとんどは、私たちインターアクトクラブが寄贈したものなんですよ」。

そう教えてくれたのは同会長の田中萌さん。地域に根差した様々なボランティアを行なっている同会では、地元企業から提供される産業廃棄物を再利用したリサイクルが活発だ。

ネクタイに使用するのは、カバン素材の資材会社から提供されたベルト用テープ。日焼けや色落ちなどで使えなくなった素材を編んで加工している。

「消毒ボトルはどうしても無機質な印象になりがちです。カラフルにアレンジすることで気持ちが下がりがちな〝消毒〟を楽しく行なってほしいと思い、先輩たちと考えました」と田中さん。

他にも人気なのが、カバン素材を使ったミニランドセルのストラップだ。手のひらサイズながらも本物のように蓋が開閉し、小物入れとして使えるよう工夫されている。

プレゼント先は近隣の幼稚園をはじめ、東日本大震災や岡山県の洪水災害を被った被災地など。特に宮城県気仙沼市の高校とは、9年前から交流が続いている。東日本の被災地支援を長年継続している被災地外の学生クラブは珍しいそうだ。

田中さんは「仮設住宅など、一般的な旅行では訪れる機会がない場所にも訪問しました。被災地の方々が遠方の私たちを受け入れてくださるのは、先輩が今まで積み重ねてくれた信頼があるからです」と噛み締める。

ボトルネクタイもミニランドセルも、どちらも「鞄のまち」豊岡ならではの素材が活きている。作り方は全て先輩から後輩へ伝えられ、生徒以外は知らない。複雑な作業も全て生徒たちによるものだ。

副会長の増田希乃花（ののか）さんは「裏側でこんなに細かい作業をしていると思っていませんでした。カシメをとめる時に力を入れるので、たくさん作ると手が痛くなるんですよ」と笑った。

そんな大変さを吹き飛ばすのが、全国のボランティア先から届く感謝の言葉だ。幅広い年代から、手紙や色紙などで喜びが綴られている。2人は「あまり言われることがないのでうれしいです」と声を弾ませた。

「コロナの影響で例年通りの活動は難しいですが、今できる活動に力を入れていきます」と田中さん。生徒たちの暖かいアイデアで生まれ変わった豊岡の資材は、これからも羽ばたいていく。